

## “日常管理のノウハウ”の連載にあたり

宮武 秀男

皆さん、近年の放射線を取り巻く環境には、向い風が吹いていると思いませんか。例えば、放射線施設を新たに設けようとする声はほとんど聞こえなくなり、それどころか施設の廃止を計画する大学・研究機関が増えてきている。また、人に目を移すと、放射線安全管理に携わる人は高齢化傾向にあると言われて久しい。働く人の新陳代謝が起り難い業界である。近年、長年施設を守ってきた担当者が定年退職した後、長年現場で蓄積された知恵や技術を伝達することなく、その後任に大学新卒者が着任する事業所があると聞く。更に、放射線行政からの要請は、世情を反映して厳しくなる傾向にあり、事業所によっては、その対応に苦慮することとなる。この度、このような施設・人・放射線規制が混沌とする状況を危惧する人達が集って、「放射線取扱施設における安全管理技術の継承分科会」を立ち上げました。

さて、『放射線安全管理技術って何?』と問われると、人はどのように答えるのでしょうか。ある人は、放射線測定技術と言ひ、ある人は、コミュニケーション能力と答える。また、立入検査の対応能力と言う人がいるかも知れない。だが一方で、機械加工や美術工芸の世界のように手法的な技の伝承とならない面があるのが『放射線安全管理技術』ではないだろうか。時には、「ここだけの話…」という謎回答も大事な技術となり得る。この分科会では、安全管理技術のより実質的な継承の方法も模索していきたい。

ところで、主任者に求められる資質として『放射

線のプロフェッショナル—知識、見識、胆識、そしてこれから……—（この人、こんな所）』の記事（本誌2010年7月号）が紹介されていた。その中で著者は、主任者が『研究の進捗を遅らせるような管理をしていないか?』と述べられていたのを思い出す。今、利用者の視点の安全管理が忘れられてはいないか。これまで大先輩方が思い描いた“放射線利用法”が“放射線障害防止法”となり、そして今年の法改正で“放射線規制法”と変貌した。新人管理者にとっては、この法の名前を見るだけで、規制することに気持ちが向いてしまい、挙げ句の果て、RI利用者を疎かにしないかと危惧する。放射線利用があつての放射線安全管理、という大前提を見失つては大変である。これから色々な場面で苦勞する新人管理者が、過去に辛い思いをしてきた大勢のベテラン管理者の知恵を拝借できる体制があれば、新人管理者も安心して業務を遂行できる。そんな放射線安全管理情報の共有の場を目指して、活動の輪が広がることを願っている。

本シリーズでは、ベテラン管理者の貴重な体験談や新米管理者の試練、苦悩を紹介いたしますので乞うご期待。

（放射線取扱施設における安全管理技術の継承分科会 / 京都大学環境安全保健機構 放射性同位元素総合センター）

---

この連載は「放射線取扱施設における安全管理技術の継承分科会」による放射線安全管理のノウハウを紹介するものです。メンバー：宮武秀男（代表）、菱本純次、池本祐志、近藤真理、都留忍、高椋光博、増田晴造、岩崎智之、東山真二、三輪美代子、坂口修一、小山由起子、河嶋秀和、阿部利明、松本洋平、角山雄一